

出会い (5)

奥村 一郎



奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりパチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンズ宗教研究所）など多数。

その時、なにがあったのか？

なにもなかったといえば、嘘になる。

なにかがあったといえば、．．．？

1. 猪突猛進

生まれ年が猪であったせいか、戦中の特攻隊のごとく、わたしは、聖書とカトリック教会に真っ正面から頭をぶっつけていった。というのも、前に述べたように、聖書はキリストを神話化し、カトリック教会はそのキリストをさらに偶像化して、この二千年間、宣教や殉教の美名のもとに人類を欺いてきた元凶である、というのが、その頃の私の持論であった。そこで、長年の間にそのカトリック教会によってでっちあげられてきたキリストの仮面を剥ぎ落とさねばならないという使命感に私は燃え上がった。それからというもの、聖書にみるキリストの虚像を否定する理論を固めるため、まるで気が狂ったかのように猛勉強を始めた。洋の東西を問わず聖書学や神学書を読み漁った。古いもので有名なものでは、大逆事件（明治43年）の張本人として処刑された幸徳秋水（1871-1911）『基督抹殺論』（1911年刊）を夏休みに滞在していた寺で読み耽ったのもその頃。また、十九世紀のカトリック教会をゆずぶったフランスのE. Renan（ルナン、1823-1892）『イエス伝』（1863年刊）の「比類なき人間キリスト」などに共鳴、また、独断的権威主義のために内部分裂をくりかえしてきた教会の悲惨な歴史を他山の石として、日本的キリスト教を掲げた内村鑑三（1861-1930）の「無教会キリスト教」の理想にも学ぶものがあつた。また、そこには、数多くの優れた知性人がいたなかで、とくに当時の東大総長南原繁や、その後任の矢内原忠雄総長らの直接また間接の影響も少なからず受けた。それに少しばかり身につけていた英語と独語の知識を駆使して、ナーベルフェルト師の書棚や、東大のロックフェラー図書館などから、役立ちそうな論文や書物を狩り集めてきてはメモを丹念にまとめ、自分なりに納得のいく反カトリック的キリスト論の理論構成をめざしてガムシャラに突進した。

2. 法学部卒業試験

ところで、独学一筋、指導者も協力者もなく孤立無援、泥沼に

引き摺り込まれるような悪戦苦闘のうちに、アッという間に二年がすぎ、いつのまにか、法学部卒業期日が間近に迫ってきていた。というのも、生涯の課題として必死になって取り組もうとしたキリストとの格闘になんの関わりもない法学部の講義には全く興味がなく、旧制一校の頃から恩師でもあり、その時、東大文学部長であった桂寿一教授に願って、専ら哲学、比較宗教学など、文学部での様々な講義を夢中に聴講し回っていたため、法学部の卒業試験のことに気がついたとき、迂闊にも手元に本も講義ノートもない。ハタ！と困ってしまった。怠けてしまった復学後二年分の試験科目を一挙にパスしなければ留学が退学！そんな事になれば、いつも貧しい中から学費の仕送りをしてくれていた両親に顔も立たない。

a. そんな困惑の最中、「苦しい時の神頼み」、助け船が見つかった。というのも、「同病相哀れむ」、とやら、同じような窮地に陥って困っていた私のようなオサボリ学生のなかに旧制一校時代からの幾人かの仲間がいた。その連中が一緒になって共同戦線を張ろうということになった。ひとりが一科目、事前に要点をまとめる。試験前夜に一所に皆集まって三十分ほどその話をきく。翌日、皆そろって試験場に行くという形。一回勉強するだけで十回の試験をパス。この方法は、幾つかの小課題に大いにパワウを発揮してくれた。しかし、私にはこれでも間に合わなかった。全受験科目を一挙にパスしなければならなかったからである。自分一人でやらなければならない幾つかの大きな課題が残っていた。そこで、別の助け船をひとりで工夫しなければならなくなった。

b. 楢円理論：また思案の挙げ句、一つの小さな考えが、ふと浮かんできた。格好良く「楢円理論」と名づけた。大したものではないのだが、とにかく、マスターキーのように、どの試験の扉も開けることのできる鍵のようなひとつのアイディアが欲しかった。今様

に言えば、地球上どこにでもとどいて標的を粉碎する巡航ミサイルに比べてもよい。今ここで、その名(迷)案を解説する余裕はないが、いくつかの難関突破の新兵器になってくれた。とくに、威力を発揮してくれたのは、尾高教授の法哲学。最も難解な講義で、その試験も難しいといわれていた課目。わたしは、最後の二回の講義に出席しただけであった。ここで、初めて謎の新兵器、楢円理論を使用、数枚の長い答案を書いた。全くの自己流のものでしかなかったが、驚いたことに「優」という最高点をもらい、大学の噂にまでなったくらい。そのあと、経済学概論やその他の試験にも応用し、どれも、まずまずの成果をあげて、我ながら、ちょっといい気持ちになっていた。「何でも来い!!」と。

c.ところで、すこし傲慢になっていたところで、思わぬ伏兵がいた。殆どすべての試験を通過して、最後に商法の試験が残っていた。悪いことに、わたしは、この授業に一回も出たことがなかった。著名な大内兵衛教授の試験だけに、大教室が学生で一杯だった。教授は黒板に二つの問題を大書した。

(1) 昨年、わたしは何を話したか？

(2) 来年、わたしは何を話すだろうか？

その他、今思い出せない小さな質問が二つ程あった。ショックを受けたのは、言うまでもなく、わたし達サボリ仲間。完全にノックアウト！授業に出ていた大半の学生にはご褒美のように有り難い、まことに易しい問題。私はヤラレタと思った。流石の名物教授。当時の学生を戒めるのに見事な質問。オサボリ組は、悔しそうに、「ダメダ!」と呟きながら次々と試験場を出ていってしまった。わたしの新兵器ミサイル、「楢円理論」も間に合わない。しかし、わたしは、その時、ここぞとばかり腹を決めた。と言うのも、ここをパスしないなら、いままでの努力は全く水泡に帰してしまうからである。じっと右手に鉛筆をにぎったまま数分...突如、思いついた。

(1) 昨年、わたしは何を話したか？

答 過ぎ去ったことに興味はない。

(2) 来年、わたしは何を話すだろうか？

答 あなたが知っていれば足りる。

次に、私は書き始めた。「このような愚問を出すべきではない。出すべき質問は“来年、わたしは何を話すべきか？”と問うべきである。それについて私は書く。」と前置きして、得意の「楢円理論」をふりかざし、時間の許す限り何枚も力一杯書いて答案を提出した。採点は「優」、しかも、大内教授はたいへん感心されたそうで、まるでオリンピックの金メダルをもらったように嬉しかった。この「楢円理論」最後の功績によって、昭和22年(1947)9月30日、無事、東大法学部政治学科卒業。内容の全くない奇異な卒業証書を手にして故郷の父母のもとに暫く帰った。しかし、後は、世の常とする就職と結婚というように、事は簡単に運ばなかった。むしろ、予想もしなかった本格的な嵐の前の静けさのようなひと時であった。(つづく)



東大在学時代(昭和23年)両親と